

## 顛倒

凡夫

「罪業もとよりかたちなし 妄想顛倒のなせるなり

心性もとよりきよけれど この世はまことの人ぞなき。」

これは「愚禿悲歎述懐和讃」の中の一首であります。

「一切の衆生、心性本より浄なり」（方等大集経）とは、大乘仏教の提唱する根本信念であります。聖道門とは実にかかる信条の上に立って、眞実清浄なる心性の黄金無垢を、修行によつて練磨して、輝きあらしめることであります。諸仏にあつて増さず、衆生にあつて減ぜざる、清浄眞実の黄金無垢の心性ということは、論理的には肯けることであり、内薰力外薰力、相待つて、ついに心性の發揮の段階もわかることでもあります。

しかるに聖人は「心性もとよりきよけれど、この世はまことの人ぞなき」と、一応は肯きつつも、現実人生の真相は、この根本信条を根本から裏切つていることを認めないではいられなかつたのであります。

何故に「心性もとよりきよけれど、この世はまことの人ぞなき」に至るのでありますでしょうか。これ即ち「妄想顛倒のなせる」ためであります。尊き心性は、形なき妄想のためにおわれ、濁悪の罪業に包まれて、ついに真人なきに至つたのであります。妄想顛倒こそは、六道輪廻の衆生の全てとなつてしまつたのであります。

痴

凡夫は妄念妄想を妄念妄想と知らずに、引きずり回されているのであります。したがつて顛倒、即ちひつくりかえつた、さかさまな考えから、さかさまな生き方をしてるのであります。大事を大事と知らず、小事を大事とし、力を入れないでいいことに力を入れ、力を入れなくてはならぬことを放つておく。

涅槃の、常住、大楽、大我、清浄を知らず、生死界の、無常、苦、無我、不浄を知らず、無常にあつて常住を求め、苦において楽と執着し、無我なるものを我ありとなし、不浄煩惱を清浄と誤認しているのであります。

こうした涅槃と生死とに対する智慧の眼の開かれていない「痴おろかさ」から、一切の妄念妄想が生れて来て、顛倒の生活が展開されて来るのであります。

痴おろかさこそは実に流転の根本であります。

名利

静かなる夕暮れ、山に包まれた美しい村は平和と清浄そのものようであります。しかし一步足を踏み入れますと、人の住む世界は醜悪そのものであります。そこには、女と女との、小さな問題のために、あゝ言つた、こゝう言つたというような言葉尻を拾つて、年越しの喧嘩が深刻にしつこく続けられています。男は男で、村会議員立

候補のもつれが残つて、氷のようなドスを研いでいます。何がその原因であるか、ただその名利心の満足の為であります。

何故に一切衆生はつまらぬ名利心のために動くのでありましょう。まことに眞実の念仏がないならば、迷うたどうしの人間にほめられて有頂天となり、迷うたどうしの凡夫にくさされ眞暗になつて、その外に何もありません。我らはみ光の前に静かに、こうした名利心が頭をもたげて私自身を眞暗やみにつれこもうとする、その悪魔を凝視して生きさせてもらうべきであります。

人が馬鹿にしたとて、あらゆる報復手段によつて、毒舌の限りをつくして、相手の息の根まで止めようとする。相手よりも先に自分がやられつくしているのであります。人はこの人を見て尊敬いたしません。命がけで求めた名利は、かえつて亡んでいるのであります。自分を落すものは自分であります。

## 憍慢

曇鸞大師は『論註』に

「衆生憍慢をもつての故に、正法を誹謗し、賢聖を毀訾し、尊長を捐痺す。是のごときの人、……、言教不行の苦、無名聞の苦を受くべし。」と説かれました。

憍慢とは、人格価値に対する顛倒であります。値打ちのない自分が値打ちがあるように見えて、尊い人がつまらなく見えるのであります。ですから一度憍慢心が出て来れば、自分より賢い者も、尊い人もいないのであります。したがつて「正法を誹謗し」<sup>2</sup>て平氣であり、賢者聖人を二束三文にたたきおろし、尊長の人をでも馬鹿めてかゝるのであります。こうした五逆誹誘正法こそは、美しき花園に振られる邪見の鎌であつて、やがて無間地獄の大因であります。

こうした邪見憍慢の衆生の苦の中に、曇鸞大師は「言教不行の苦」及び「無名聞の苦」を挙げられました。

「言教不行の苦」とは、如何に声をはり上げて上手に教えを説き、教令しても、誰もそれを信用するものなく、行い守つてくれるものがない苦しみであります。親は子供がその教えや命令に従わぬことを怒っています。師はその弟子の従わぬことを嘆いています。しかしそれより先に、親こそ、師こそ、教えに従っていないのであります。憍慢にして正法を誹謗しつつ、如何に教令しても誰もそれに信順する者はないのであります。自らは随わずして、人を随わさんとするは、顛倒の甚しきものであります。

「無名聞の苦」は如何によい事をして、よい名声の聞えない苦であります。憍慢の者は、如何によい事をして、名聞を求める毒素が入っているが為に、誰も感心しないのであります。誰もほめないから、ますます名聞を求めます。しかしかかる苦惱の衆生も

「是の如きらの種々の諸苦の衆生、阿弥陀如来の至徳の名号、説法の音声を聞かば、上のごときの種々の口業の繫縛、みな解脱を得。」

と説かれました。至徳の名声、説法の音声は、傲慢があつては絶対に聞かれませんが、如来は衆生の傲慢の顛倒を対治して、合掌して正法に随順せしめて、苦を除きたもうのであります。

### 愛憎

彼女は専門教育を受けた職業婦人であります。両親は彼女に金を入れて、それから生れる社会的名声と豊かな物質とを期待していました。しかし彼女は一人の愛人を持つていました。それは一度は両親も婚約いひなづけにするつもりとした男でした。しかし男の社会的位置は低かった。彼女はいつしか、その男の種をやどしておりました。家庭には風波のたえ間がない。やがて子供が生れると、子供は産褥から親たちの手でどこへか葬られてしまった。母！母性愛！子供はどこへ行つた。気も狂つてしまいそうな彼女、幾歳が流れてゆく間の愛憎の悪魔は家庭の隅々にまで食い入つて、今ですでに愛憎さえ越えて、親は彼女を監禁同様に取り扱い、彼女は親を悪鬼としか思わない。手紙という手紙は一本も彼女には渡されない。一言でも反抗すれば、強度のヒステリー症の母親は全身をひきつけて倒れてしまうと云う。それでも彼女は、死骸のごとき体を四方に運んで、両親の名利の為に働かねばならない。

あわただしく、私どもの視野に現われた幽霊のごとき彼の女は、時が遅れてはと、後の崇りをおそれて、風の如く消え去つてゆきました。一時浮んだ地獄の罪人が、見るまに八寒の氷にすい込まれてゆくように。

太古からの平和が、悪魔の手に握られた近代科学の暴力によつて、逆殺され蹂躪3され掠奪されたエチオピアの国の哀れな人たち。

二十年も同棲しながら、妻のいびきが高いとて、喧嘩したはてに、妻を殺してしまつた男。

共産ロシアでは、政治上の思想相違の問題で、スターリンによつて殺された人、十年間に百七十万人と、新聞記事は報ずる。同胞たがい相殺しているイスパニヤの革命、幾百千の同胞に油をかけて生不動いきふどうにするといった残忍、逆殺又逆殺、河水も時に紅なりと云う。

ああ、大地は愛憎の炎に焼けたゞれている。

「無明煩惱しげくして 塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは 高峯岳山にことならず」(正像末和讃)

妄想顛倒の凡夫の前には、正しいものが正しいと認められません。顛倒の凡夫、顛倒の世間、虚仮そのものゝ中に、お念仏のみが末通る真実であります。しかもその念仏すら誹謗の対象となります。

「有情の邪見熾盛にて 叢棘刺のごとくなり

念仏の信者を疑謗して 破壊瞋毒さかりなり。」

衆生の邪見の熾盛なることは、叢棘刺、叢はくさむら、林ははやし、棘はいばら、刺はとげで、邪見煩惱はくさむらや林のごとくみちみちて、瞋毒のはげしきことは棘いばら、からたちの刺とげの如くであります。念仏の信者は悲しくも、この邪見瞋毒によつて疑謗せられ破壊せられます。

聖人は静かに念仏の真実道を歩みつつ、この和讃の如き悲しき大地の顛倒虚仮を諦観して悲歎して生きられたことでありましょう。

しかし幸なる哉。念仏の行者は、如来の智慧を恵まれて、ほのかに生命の黎明よあけに立って、世間虚仮唯仏是真を信知せしめられて来ます。瞋毒疑謗に苦しみつゝも、それよりももつと明らかに、歩むべき白道を凝視みつめして生きてゆきます。念仏道に立てば、自他一切の妄想顛倒がかすかに見えて来ます。

人の世は顛倒虚偽に満ちています。しかし軽々しく他人を非難している時、すでに我が手元も狂っています。沈黙してみ教えに聞きつつ、合掌して静かに一道を歩むべきであります。念仏道の歓喜と明るさは瞋毒の辛からさよりも、もつと強いことがわかつて来るでありますよう。